

序

検査は日々の診療に欠かせないものですが、あまりに数多くの検査が存在するので検査の選び方に迷う、また結果をうまく解釈して診断に結びつけられない、という研修医の声をよく耳にします。困惑する理由として、異常の出るメカニズム（病態生理）を理解できていないこと、鑑別診断を立てて（仮説を作つて）その鑑別疾患仮説を除外・確定するために検査するという考え方（診断推論のフレーム）がないことなどが挙げられるでしょう。

検査に関する書籍は多数出版されていますが、現行の書籍は検査項目ごとに基準値や診断名等が網羅的に記載されている便覧的なものが多く、検査の基本を理解して診断に結びつけるための考え方、使い方を解説した初学者向けの書籍は少ないのが現状です。

そこで、本書では、検査結果に振り回されることなく、診断に結びつける力を養うことをめざした、初学者向け入門書として以下の構成としました。

▶第1部「検査の考え方」

検査の目的と、目的に応じた運用の考え方について解説。

▶第2部「病態生理と検査特性からわかる検査の基本」

検査が何を測定しているのか、知っておくべき基本的な病態生理、異常値に対する代表的な鑑別疾患とそのアプローチ、感度や特異度などの検査特性について解説。

▶第3部「検査値から診断に迫るケーススタディ」

実際の症例をもとにどんな検査を選択し、検査結果をどう解釈するかについて解説。

なお、第1部はなじみのない読者には少し難しいかもしれません。難しければ飛ばして読んでもらって構いません。明日からすぐに臨床に役立てたい人は第2部から読むのがよいでしょう。ただし、第1部の内容を理解していないと臨床経験を重ねるうちに行き詰まる可能性が高くなります。検査の考え方を深く理解するためにいつかは第1部をじっくり読んでください。

本書が検査の読み方、考え方を理解する一助となり、ひいては患者さんのアウトカムをよくすることに貢献できれば幸いです。

2013年9月

著者を代表して

野口善令

(名古屋第二赤十字病院総合内科)